

[話題]

日独シンポジウム

「日本とドイツにおける予防医学と公衆衛生」を終えて

森 千里^{1,2)} 柏原 誠³⁾ 戸高 恵美子^{1,4)}
鈴木 都¹⁾ 中岡 宏子¹⁾ 羽田 明^{1,5)}

要 旨

日本とドイツは150年以上もの連携、文化交流の歴史がある。日本の近代医学は約130年前にドイツよりもたらされ、なかでも公衆衛生は最も重要な分野の一つである。2014年2月18日にドイツ、ベルリンにおいて日独シンポジウム「日本とドイツにおける予防医学と公衆衛生」が開催された。このシンポジウムは千葉大学予防医学センター、在独日本大使館、シャリテ・ベルリン医科大学BSPHとベルリン日独センターの共催で開催され、齋藤 康 千葉大学長、中根 猛 在ドイツ連邦共和国特命全権大使、坂戸 勝 ベルリン日独センター副事務総長、ジャクリーン・ミュラー＝ノルドホーン教授/BSPH院長から開会に際してのご挨拶をいただいた。シンポジウムでは日本とドイツにおける公衆衛生の歴史とともにヨーロッパにおける公衆衛生の最近の傾向が紹介された。ヨーロッパではASPHER (Association of School of Public Health in European Region) が設立され、ヨーロッパ地域において国をまたいで共通の教育プログラムや課程推奨基準を共有し、連携をしていく試みが始まっている。千葉大学、金沢大学、長崎大学の3大学共同予防医科学大学院はこのASPHERの取り組みを参考としてその課程を作り上げていく予定である。なお、現在、千葉大学はASPHERのAssociate memberである。

Key words: 日独シンポジウム, 予防医学, 公衆衛生, 国際連携, ASPHER (アスパー)

略語一覧: WHO (World Health Organisation), QOL (Quality of Life), ASPHER (Association of School of Public Health in European Region)

はじめに

医学医療の分野では、「21世紀は予防医学の時代である」と言われている。世界的にも、医学医

療分野におけるQOL重視の考え方は広く一般的になってきた。WHOが2000年に、障害が無く自立した生活ができる期間を「健康寿命」とし、新たな健康指標として提案したことは記憶に新し

¹⁾ 千葉大学予防医学センター

²⁾ 千葉大学大学院医学研究院環境生命医学

³⁾ シャリテ・ベルリン医科大学

⁴⁾ WHO 環境保健部

⁵⁾ 千葉大学大学院医学研究院公衆衛生学

Chisato Mori^{1,2)}, Makoto Kashiwabara³⁾, Emiko Todaka^{1,4)}, Miyako Suzuki¹⁾, Hiroko Nakaoka¹⁾ and Akira Hata^{1,5)}: A report of "Japan-Germany Symposium on Preventive Medicine and Public Health".

¹⁾ Center for Preventive Medical Sciences, Chiba University, Chiba 260-0856.

²⁾ Department of Bioenvironmental Medicine, Graduate School of Medicine, Chiba University, Chiba 260-8670.

³⁾ Berlin School of Public Health, Charité-Universitätsmedizin.

⁴⁾ WHO (World Health Organization).

⁵⁾ Department of Public Health, Graduate School of Medicine, Chiba University, Chiba 260-8670.

Phone: 043-226-2017. Fax: 043-226-2018. E-mail: cmori@faculty.chiba-u.jp

い。従って、医学医療が疾病の治療にとどまらず、疾病発症を未然に防ぐ「予防」を優先するという考え方に向かうことは必然であり、「予防医学」の発展は、人類の未来を支えるものと言える。

日本の近代医学は、1870年に明治政府が相良知安らの提案を採用してドイツ医学を学ぶことを決定し、多くの優秀な医学者がその時代の最先端を走っていたドイツに留学することから始まった。筆頭著者の曾祖父、森鷗外もその一人である。鷗外は、ミュンヘン大学で衛生学講座を創設し、「近代衛生学・環境医学の父」と呼ばれたマックス・ペッテンコーファー教授や、結核菌やコレラ菌を発見し、「近代細菌学の開祖」と呼ばれたロベルト・コッホ教授のもとで学び、帰国後、現在の公衆衛生、細菌学、予防医学の礎を築いている（文献[1]）。

このように、日本とドイツは、互いに重要なパートナーとして現在にいたるまで様々な分野で交流・連携を重ねているが、少子高齢化や高齢者介護、環境要因による健康影響、生活習慣病や多重疾患患者数の増加など、共通の課題も多い。そしてこれらの共通課題を両国の叡智を結集して克服するためにも、予防医学の研究および人材養成における国際連携が重要であるとの認識が高まってきている。

このような状況の中、2014年2月18日、ドイツの首都ベルリンにおいて日独シンポジウム「日本

とドイツにおける予防医学と公衆衛生」が開催された。本シンポジウムは、千葉大学予防医学センターが中心となって、平成24年度国立大学改革強化推進事業として採択された「真の疾患予防を目指したスーパー予防医科学に関する3大学（千葉・金沢・長崎）革新予防医科学共同大学院の設置」事業の国際連携の一環として行われた。ここに、本シンポジウムの内容と同国際連携において、現在、計画しているドイツとの連携の方向性を千葉医学会会員の皆様にご報告させていただく。

Ⅰ. 日独シンポジウム「日本とドイツにおける予防医学と公衆衛生」の概要

2014年2月18日、ドイツの首都ベルリンにおいて日独シンポジウム「日本とドイツにおける予防医学と公衆衛生：過去から未来へ」が、千葉大学予防医学センター、シャリテ医科大学・ベルリン公衆衛生大学院（Berlin School of Public Health: BSPH）、在ドイツ日本大使館、ベルリン日独センターの共催で、齋藤 康 千葉大学長（当時）、徳久剛史 千葉大学理事（現学長）、中村信一 金沢大学長（当時）、中根 猛 在ドイツ連邦共和国特命全権大使のご臨席のもと開催された（写真1）。

シンポジウム当日は、日独の予防医学・公衆衛生学の専門家や医療関係者が集い、3大学関係者を含め約120名が参加した。また、19日には、フ



写真1 ドイツ・ベルリン日独センター正面玄関前にて
(2014年2月18日 ベルリンにて撮影)



写真2 2月19日、フンボルト大学本部学長室において、在独日本大使館関係者のご臨席のもと、オルベルツ・フンボルト大学長と齋藤 康 千葉大学長（当時）及び徳久剛史理事（現学長）の間で、両大学の今後の協定に関する契約書へのサイン式が行われた。

ンボルト大学本部学長室において、オルベルツ・フンボルト大学長と齋藤 康 千葉大学長（当時）及び徳久剛史理事（現学長）の間で、両大学の今後の協定に関する契約書へのサイン式も行われた（写真2）。

シンポジウムでは、冒頭、齋藤 千葉大学長（当時）、中根 特命全権大使、坂戸 勝 ベルリン日独センター副事務総長、ジャクリン・ミュラー＝ノルドホーン教授／BSPH院長から本シンポジウム開催に際しての挨拶を頂いた。続いて当方から「日本人医師のベルリンでの足跡－森鷗外の場合－」、BSPHのブリギッテ・ミヒェル博士から「ドイツにおける公衆衛生の歴史」の講演があり、中村 千葉大学・金沢大学・長崎大学革新予防医科学共同教育研究センター長から3大学共同大学院設置事業の趣旨及び概要について説明、そして、ミュラー＝ノルドホーン教授から「ドイツにおける予防医学と公衆衛生の今後」の講演と続き、休憩をはさんでパネルディスカッション「公衆衛生と予防医学の領域の今後と国際化」が行われた。疾病の予防という世界的な課題に対して、これからは解決策を立案・実行できる人材が求められていることが共通の認識として確認された。

II. 「3大学（千葉・金沢・長崎）革新予防医科学共同大学院の設置」事業の国際連携とヨーロッパの公衆衛生大学院の方向性

3大学共同予防医科学大学院博士課程（医学博士）は、欧米の世界的流れを参考として従来の「予防医科学」と「公衆衛生学」に時代の進歩に併せた公衆衛生学関連分野も包含した分野を対象とし、Research basedでPopulation perspectiveを基盤として、プロフェッショナルな「新しい予防医科学」を実践できる知識と技量を身に付けた専門家・リーダーを育成することを目指している。今後、ヨーロッパにおいて異なる国、異なる大学間、そして遠隔地どうしでの連携・共同体制で、新たなPublic Healthの大枠を定めようとしているAssociation of School of Public Health in European Region (ASPHER) の取り組みを基に新しい共同予防医科学大学院博士課程を作り上げる予定である。その特徴は、社会のニーズを踏まえ、ヨーロッパ型の枠組み・取組み方針を基盤として、日本における「先兵」として「新しい予防医科学」を創出し、Public Healthの枠組み・取組み方針の統一化を目指す事にある。

今回のシンポジウム開催では、ヨーロッパにおける公衆衛生大学院教育の流れについての知見を

得ることを目的の一つとした。

ミューラー＝ノルドホーン教授による「ドイツにおける予防医学と公衆衛生の今後」の講演の概略は以下のとおりである。

これまでの公衆衛生大学院は、アメリカのハーバード大学、イギリスのロンドン大学などそれぞれの公衆衛生大学院が独自に自分の大学の中でシステムを構築し独自の発展を遂げてきた。そしてこれまで日本は、それらの中の優れた大学院にならってそれぞれの大学独自の公衆衛生大学院の発展を目指してきた。しかし、最近のヨーロッパの公衆衛生分野においては、ヨーロッパ全体としての教育システムや共通認識を持つことが非常に重要という考えに基づいて新しい枠組みである ASPHER（アスパー）が形成されている。ASPHERでは、従来の公衆衛生学に時代の進歩に併せた、幅広い公衆衛生関連分野も包含し、大学院博士課程では、学生が研究に基盤を置いた考え方をもち（Research based）、公衆衛生に関する分野で研究論文が書け、かつ、プロフェッショナルな公衆衛生のリーダーとなる知識と技量を身に付けることを目標としている。研究対象は医学分野全般であるが、公衆衛生大学院であるため集団を対象とした研究（Population

perspective）とし、ASPHERにおいて、ヨーロッパ統一型の公衆衛生大学院博士課程を目指している。また、ASPHERのまとめ役の一つとなっている BSPH/シャリテ・ベルリン医科大学は、2013年にフランスのソルボンヌ大学との共同大学院センター Virchow-Villermé Centre for Public Health (<http://virchowvillermé.eu/de/>) を設立している。ヨーロッパ ASPHER における PhD 課程の推奨基準については、以下の通りである。教育課程の期間は一般的 PhD と同様に 3 年から 5 年を限度とする。ヨーロッパ公衆衛生 PhD は十分かつ有効な知識により自立して調査研究のできるクオリティーを身につけることを目標としている。基礎授業形式はおよそ 6 ヶ月必要である。学生のバックグラウンドによる知識や経験の差は各組織で補うよう努める。その 6 ヶ月の中に国際的調査、政策作成、経済学などの授業も含むべきである。共通スキルとして調査の不特定多数の人へのプレゼンテーション、大学内での教育、言語、プロジェクトマネージング、科学学術的文献の評価、ローカルネットワーク、インターナショナルネットワーク、などのスキルの会得が望まれる。これらについては基礎授業にも含まれるべきである。さらに、ヨーロッパ間での共同・連携が



写真3 シンポジウム後半にはディスカッションが行われ、シャリテ・ベルリン医科大学のペーター・ティネマン博士の座長のもと、ヨーロッパの公衆衛生の分野で著名なロルフ・ローゼンブロック総連合会代表が「医師だけで疾患の予防をすることはできない。健康へのリスク要因については社会的介入が不可欠であり、政治や法律などの分野の専門家も予防医学に参加することが必要である」と述べられた。

進んでいることを鑑み、サマースクールなどの開催を共通の課題とする。そして、卒業者は公衆衛生分野においてリーダーシップを取り得るポジションにつけるようなDPH（公衆衛生専門家としてのProfessional PhD）として活躍できることを目標とする。ロンドン大学公衆衛生大学院のEducation Strategy 2012-17においてもASPHERとの協調は明記されている。（http://www.lshtm.ac.uk/edu/education_strategy.pdf）また、インターネットを利用した授業形態には今後、力を入れていく事が掲げられている。

シンポジウムの後半では、ヨーロッパの公衆衛生の分野で著名なロルフ・ローゼンブロック総連合会代表が「医師だけで疾患の予防をすることはできない。健康へのリスク要因については社会的介入が不可欠であり、政治や法律などの分野の専門家も予防医学に参加することが必要である」と述べてディスカッションを終了した（写真3）。

おわりに

近代日本の礎が築かれてから約130年。数々の困難や危機を乗り越え、今、ドイツと日本の両国は、政治・経済面での協力はもちろんのこと、文化や学術分野においても、交流・連携の範囲はますます広がっている。その一環として、今、こうして予防医学・公衆衛生学に関するシンポジウムを開催できたことに、万感の思いがある。3月5日付けのドイツ医学新聞に本シンポジウムが紹介された。「ドイツと日本は今後も予防医学分野での公衆衛生活動を共にし、お互いが切磋琢磨して専門家のレベルを向上させて行かろう。それは予防が最も優れた医療と考えられているかである」と締めくくられている。日独シンポジウムは今後も続ける予定であり、2014年10月11日には「森鷗外と公衆衛生の世界史」のテーマにてフンボルト大学本館講堂で開催、12月1日には、「子どもの健康」のテーマにて日独センターで開催予定である。日独の大学間での新たな架け橋となる交流活動となっていくことを願っている。なお、千葉大学予防センターは、2014年5月28日にASPHERのAssociate memberに東アジアで初めて承認された。

謝 辞

今回の日独シンポジウムを共催していただきました在独日本大使館、シャリテーベルリン医科大学BSPH、ベルリン日独センターの皆様、および多くのご示唆をいただきましたフンボルト大学、鷗外記念館の皆様へ深謝申し上げます。また、中村信一学長（当時）、中村裕之教授をはじめとする金沢大学の先生方、永山雄二教授、篠原一之教授をはじめとする長崎大学の先生方にご助言、ご協力を頂戴しましたことを感謝いたします。

SUMMARY

Japan and Germany have more than 150 years of history of mutual cooperation and cultural exchange. Japanese modern medicine was introduced from Germany about 130 years ago, and public health is one of the most important fields of modern medicine which was introduced from Germany. On the 18th February, 2014, a symposium, "Japan-Germany Symposium on Preventive Medicine and Public Health" was held in Berlin. The symposium was co-organized by Center for Preventive Medical Sciences of Chiba University, Embassy of Japan in Germany, Berlin School of Public Health (BSPH), Charité-Universitätsmedizin Berlin, and Japanese-German Center Berlin. The presidents of Chiba University, His Excellency Takeshi Nakane, Ambassador of Japan to the Federal Republic of Germany, Mr. Masaru Sakato, Deputy Secretary General of Japanese-German Center Berlin, Professor Jacqueline Müller-Nordhorn, Department Chair of BSPH gave opening remarks. In the symposium, the history of public health in Japan and in Germany was presented. Also, recent trend of school of public health in Europe was introduced. In Europe, Association of School of Public Health in European Region (ASPHER) was established. Schools of Public Health of European countries are trying to have common program, common requirements to graduate, having networking among the schools. Chiba University, Kanazawa University and Nagasaki University formed "3 universities united graduate program of public health", and ASPHER is a good example to direct forward. Chiba University is now going to be an associate member of ASPHER.

文 献

- 1) 森 千里「鷗外と脚気」NTT出版、2013.